

## 搬送ラインの導入の効果と今後の展望

◎内山 大樹<sup>1)</sup>、大瀬 彩子<sup>1)</sup>、栗田 哲至<sup>1)</sup>、谷高 由利子<sup>1)</sup>、福田 淳<sup>1)</sup>  
社会福祉法人聖隷福祉事業団 総合病院 聖隷三方原病院<sup>1)</sup>

### 【はじめに】

当院では、院内検体のほかに健診検体を受託しており、1日1,500~2,000件の検体を測定している。従来装置では、工程数が多く作業が煩雑であり、検体ラックへの載せ替え作業が複数回あることによる検体紛失やコンタミネーションリスクがあった。また、試薬詰替による試薬補充間違いのリスクも発生していた。これらを解消すべく、2023年1月に生化学・免疫分析装置cobas8000及び搬送ラインを導入した。導入から約1年半経過し、従来装置との運用や業務体制の比較、機器更新による効果や今後の展望について紹介する。

### 【運用と効果】

- ① 搬送ライン導入により到着・遠心・分注の検体処理が前処理装置で完結し、作業工程が減少した。
- ② 分析終了後の検体が専用の冷蔵ユニットへ収納、自動廃棄されるため、検体の保存や廃棄の簡易化、技師の検体暴露防止にも繋がった。
- ③ 再検査を実施する際、自動で冷蔵庫から分析装置へ

搬送可能であるため、再検作業が省力化した。

- ④ 分析装置更新により試薬補充が簡易化し、試薬詰替による補充ミスやコンタミリスクが減少した。
- ⑤ 免疫項目の測定時間が短縮した。
- ⑥ 作業工程が減少したことにより、これまで検体処理を実施していた人員を混雑する部署へ重点的に配置することができた。

### 【課題と今後の展望】

搬送ライン導入と機器更新により、cobas 8000にて測定する検査項目のTATは改善傾向にあるが、前処理装置分注後、他装置へ架設する検体におけるTAT遅延や、健診検体架設時に院内検体のTATが遅延してしまうこと等の課題が残る。今後は、人員配置の見直しにより確保できた時間を活用し、採取管や採血量見直しによる患者負担軽減、再検値や再検率見直しによるTAT短縮、若手教育の強化、チーム医療へのより積極的な参画にも努めていきたい。

連絡先 053-436-1251